

コンフリクト・リゾリューション教育の

企画報告

いとうたけひこ

『コンフリクト・リゾリューション教育：学校での紛争解決教育（CRE）の可能性』という企画が、2011年9月10-11日に信州大学で開催された日本応用心理学会第78回大会の自主企画ワークショップとして行われた。企画・司会はいとうたけひこ（和光大学）、報告者は水野修次郎氏（麗澤大学）、室井美稚子氏（清泉女学院大学）、杉田明宏氏（大東文化大学）、井上孝代氏（明治学院大学）の4人、そして指定討論者として大淵憲一氏（東北大学大学院）をむかえて議論がなされた。そこでのキーワードは、ピア・メディエーション、ガルトゥング、コンフリクト、SABONAであった。

学校内のコンフリクトを解決するための方法としてコンフリクト・リゾリューション教育（紛争解決教育；CRE）が行われている。本企画では、紛争解決教育を実践している心理学者を中心に各々の立場から活動報告を行ってもらい、日本における紛争解決教育の現状と可能性について議論を深めることが目的であった。

進行は、まず教育実践に関して、はじめに関西のM公立高校のピア・メディエーションを支援している水野氏から報告があった。次に、北欧で発展しているコンフリクト解決教育の方法であるSABONAプロジェクトについて室井氏が紹介した。続いて応用心理学の理論的な問題に関して、まず杉田氏より平和心理学の立場からの報告があり、次に井上氏が臨床心理学の問題としてコンフリクト解決をどう捉えるかについて報告した。最後に社会心理学の立場からのコンフリクト研究者である大淵氏より各報告に対してコメントがあった。それぞれの発表の概略を以下に紹介したい。

第1の水野修次郎氏の報告では、これまでのM公立高校における取り組みの紹介から始まった。NPOと高校と水野氏がタイアップして行った「ピア・メディエーション」を主軸とした紛争解決教育には、教員間のコミュニケーションの向上と生徒の退学率の低下という成果が得られたことが紹介された。M公立高校ではピア・メディエーションを中心にした特色ある授業を「コミュニケーションコース」のカリキュラムとして2011年度から本格的に展開してきている。このような取り組みの経過をM公立高校でさらに発展させるとともに、他の高校の教員にもピア・メディエーションを知ってもらうため、2010年8月2日、公立高校教員を主な対象に「ピア・メディエーション」の考えと技法の内容をもとにして水野氏が中心となり、井上・いとうも加わって、3人の講師による「ピア・メディエーション講習会—もめごと解決の方法」が行なわれた。そのワークショップの概要はいとう・水野・井上（2010）で紹介されている。水野氏の報告ではピア・メディエーションの重要性に加え、高校教師向けのワークショップの内容を紹介することにより、カウンセリング心理学者の果たす役割が検討された。

次に室井美稚子氏は、英語教師として、長年平和教育にたずさわってきた経験を活かしつつ、ガルトゥング平和学を基礎に開発された、SABONA によるコンフリクト解決教育の方法について紹介した。これは、マットを用いてワークショップを行う方法であり、北欧では小学生からいじめ問題などに使われて成果を上げてきている。SABONA マットは「ポジティブ/未来」「ネガティブ/過去」「ポジティブ/過去」「ネガティブ/未来」に4分割されており、そのマット上で当事者が対話によりコンフリクトを解決（転換）する方法である。日本やノルウェーなどいくつかの国々で取り入れられており、身体活動を伴う新しい紛争解決教育法として注目が集まっている。当日はマットを用いながらの SABONA 教育の具体例が紹介された。

第3に、杉田明宏氏の報告があった。いとう・杉田・井上(2010)では、ガルトゥング平和理論を主軸にしたコンフリクト転換理論すなわちトランセンド法による教員免許更新講習を小中高の現場教員に対して行い、各学校現場での応用可能性の評価が高いことが見出されている。これを踏まえ、平和心理学から、「コンフリクト概念の位置づけ」、「コンフリクト解決とコンフリクト転換の区別」、「生活上の人間関係トラブルと歴史などの教科学習におけるコンフリクトの教育の結合」の3つの問題提起を行った。杉田氏の報告は、平和心理学と紛争解決教育との橋渡しをどう位置づけるかという内容であった。

そして最後の井上孝代氏の報告では、学校での教職員のコンフリクトに対する対処方略である葛藤対処方略スタイルを扱った井上・いとう・飯田(2011)の研究成果を紹介した。概要は、第1に、他者志向と自己志向の両者を尊重する Win-Win ゲームをめざす「統合」の葛藤対処方略スタイルが最も適応的であり、望ましい人間関係や職場生活を送れること、第2に、葛藤対処方略スタイルは、精神的健康との関連の強さの観点からもその重要性が明らかになったことであった。さらに、学校でのメンタルヘルスに対応するコンサルテーションを行う立場から、コンフリクト・リゾリューション教育の可能性について、公立高校での実践経験もふまえながら、マクロ・カウンセリング的アプローチに関する報告を行った。

このあと、大淵氏よりコメントがあり、9.11以降、葛藤解決への関心が深まり、ADR (Alternative Dispute Resolution) なども注目されてきているが、日本では紛争解決教育が未だに盛んでないことをどう考えるか? などの問題提起がなされた。これを受けて、日本人のメンタリティとしての紛争回避をどう位置づけるかなどの議論に及んだ。コンフリクト・リゾリューション教育のテーマは、来年の日本カウンセリング学会（麗澤大学）でも引き続き追究される予定である。

【文献】

井上孝代 2005 あの人と和解する：仲直りの心理学 集英社

井上孝代・いとうたけひこ・飯田敏晴 2011 高等学校のステークホルダーの葛藤対処方略スタイルと適応：教職員のバーンアウト傾向及び学校特性の認知との関連 心理学紀要（明治学院大学）, 21, 1-12.

いとうたけひこ・水野修次郎・井上孝代 2010 紛争解決法としてのピア・メディエーション：関西 M 高校での取り組み トランセンド研究, 8(2), 70-75.

いとうたけひこ・杉田明宏・井上孝代 2010 コンフリクト転換を重視した平和教育とその評価：ガルトゥング平和理論を主軸にした教員免許更新講習 トランセンド研究, 8(1), 10-29.

水野修次郎・和井田節子 2004 争いごと解決学練習帳：新しいトラブル防止教育 ブレーン出版

大淵憲一 2010 謝罪の研究：釈明の心理とはたらき 東北大学出版会